

津

端

亨

編纂

現代短歌分類辭典

新裝判

48卷

現代短歌分類辭典

津

端

亨

編

纂

章

江苏工业学院图书馆藏

新装判
48卷

現代短歌分類辞典

新装版48巻

通巻206

平成七年 一月十八日発行	著者発行 兼印刷者	発行所
定價一七、四〇〇円	津 端 亨	現代短歌分類辞典刊行所
	代表 津 端 亨	〒345 埼玉県北葛郡杉戸町宮前一九六一五
		電話(〇四八〇)三八一〇〇四〇番
		振替 東京三一九三二一四

(ISBN 4-87706-206-8)

目

次

目次

歌数	頁数	歌数	頁数	歌数	頁数
ひる〔昼〕	一〇五	一	七	ひろく〔広く〕	四二
ひる〔蛭〕	二四	四	一	ひろげる〔広げる・拡げる〕	一六
ひる〔干る・乾る〕	八	五	四一	ひろこうじ〔広小路〕	一一
ひる〔ビル〕	二四一	五	一六	ひろこる〔広こる〕	三二
ひるい〔比類〕	二	二二	二七	ひろこれる〔広これる〕	二〇
ひるがい〔ビル街〕	三〇	二二	一	ひろさ〔広さ〕	二四
ひるがえす〔翻す〕	五	二二	一	ひろさき〔弘前〕	五
ひるがえる〔翻る〕	二二	二二	二	ひろさわのいけ〔広沢の池〕	一〇
ひるがお〔昼顔〕	七九	二二	三	ひろし〔広し〕	五八
ひるげ〔昼餉〕	一四三	二五	二一	ひろしば〔広芝〕	八
ひるごろ〔昼頃〕	五	一九	五	ひろしま〔広島〕	三七
ひるさがり〔昼下がり〕	九	一九	八	ひろっぱ〔広っぱ〕	五
ひるさむし〔昼食〕	一	二〇	一八	ひろにわ〔広庭〕	七四
ひるしぐれ〔昼時雨〕	六	二〇	一〇	ひろの〔広野〕	六九
ひるしょく〔昼食〕	一九	二〇	二七	ひろば〔広場〕	六五
ひるすぎ〔昼過ぎ〕	六一	二二	二	ひろはば〔広幅〕	二
ひるどき〔昼時〕	二二	二二	八	ひろひろ〔広広〕	一六一
ひるながら〔昼随〕	一	二二	三	ひろま〔広間〕	二七
ひるね〔昼寝〕	一二三	二二	四	ひろまえ〔広前〕	四七
ひるのつき〔昼の月〕	六五	二六	一	ひろまる〔広まる〕	二
ひるのま〔昼の間〕	三四	二八	二〇	ひろむね〔広胸〕	五
ひるひなか〔昼日中〕	一四	二九	一九	ひろやか〔広やか〕	七
ひるま〔昼間〕	八〇	二九	七七	ひろら〔広ら〕	六二
ひるま〔ビルマ〕	一六	三一	二五	ひろらに〔広らに〕	六一
ひるまえ〔昼前〕	一一	三二	一	ひわ〔蕪〕	五八

ひわ〔悲話〕	三	七九	びんずる〔寶頭盧〕	三	九七	ぶあいそう〔無愛想〕	二	一〇二
びわ〔枇杷〕	一六五	八〇	ひんせい〔品性〕	二	九七	ぶあつ〔分厚・部厚〕	二〇	一〇二
びわ〔琵琶〕	三四	八四	ひんせい〔稟性〕	一	九七	ふあん〔不安〕	一〇	一〇三
ひわい〔卑猥〕	一	八五	びんせん〔便船〕	一	九七	ふあてい〔不安定〕	二	一〇六
ひわいろ〔穢色〕	二	八六	びんせん〔便箋〕	六	九八	ふあんない〔不案内〕	一	一〇六
ひわだ〔松皮〕	二〇	八六	ひんそう〔貧相〕	一	九八	ふい〔不意〕	七	一〇六
ひわる	一	八六	ひんだり〔左〕	一	九八	ぶい〔ブイ〕	三	一〇六
ひわれだ〔乾割田〕	三	八六	びんづい	一	九八	ふいご〔鞆〕	一四	一〇七
びん〔瓶〕	一八九	八六	ぴんと	五	九八	ふいと	九	一〇七
びん〔贅〕	六四	九二	ぴんと〔ピント〕	一	九八	ふいに〔不意に〕	七八	一〇七
ひんい〔品位〕	三	九四	ひんのう〔貧農〕	六	九八	ふいるむ〔フィルム〕	四	一〇
ひんか〔貧家〕	一	九四	ひんぱつ〔頻発〕	三	九九	ぶいん〔部員〕	一	一〇
ひんかく〔品格〕	一	九四	ひんぱん〔頻繁〕	三	九九	ぶいん〔無音〕	二	一〇
ひんがし	二	九四	ひんびょう〔品評〕	一	九九	ふうあつ〔風圧〕	四	一〇
ひんかん〔貧寒〕	一	九四	ひんびん〔頻頻〕	一	九九	ふういん〔封印〕	一	一一
びんかん〔敏感〕	一三	九四	ひんぶ〔貧富〕	三	九九	ふうう〔風雨〕	二	一一
ひんきやく〔賓客〕	一	九五	びんぼう〔貧乏〕	三八	九九	ふううん〔風雲〕	二	一一
ひんきゅう〔貧窮〕	六	九五	びんぼうしょう〔貧乏性〕	二	一〇〇	ふうか〔風化〕	一	一一
ひんく〔貧苦〕	三	九五	びんぼうくさ〔貧乏草〕	五	一〇〇	ふうが〔風雅〕	一	一一
びんく〔ピンク〕	七	九五	びんぼうにん〔貧乏人〕	七	一〇一	ふうがい〔風害〕	一	一一
ひんけつ〔貧血〕	五	九五	びんぼうずる〔貧乏蔓〕	一	一〇一	ふうかく〔風格〕	二	一一
ひんこん〔貧困〕	一四	九六	ひんみん〔貧民〕	一	一〇一	ふうき〔風紀〕	二	一一
ひんし〔瀕死〕	三	九六	ひんみんがい〔貧民街〕	一	一〇一	ふうき〔富貴〕	九	一一
ひんじゃ〔貧者〕	二	九六	ひんみんくつ〔貧民窟〕	二	一〇一	ふうきり〔封切り〕	四	一一
ひんじやく〔貧弱〕	四	九六	ひんめい〔品名〕	二	一〇一	ふうけい〔風景〕	九	一一
ひんしゅ〔品種〕	三	九六	ひんやり	五	一〇一	ふうげつ〔風月〕	四	一一
びんしょう〔敏捷〕	七	九七	びんろうじ〔檳榔子〕	七	一〇一	ふうこうけい〔風向計〕	一	一一
びんじょう〔便乗〕	六	九七	ふ	七	一〇二	ふうさ〔封鎖〕	六	一一

ふうさい〔風采〕	一 一七	ふうてんびょう〔瘋癲病〕	一 一三	ふえき〔賦役〕	一 一四
ふうし〔風姿〕	一 一七	ふうど〔風土〕	一 一四	ふえて〔不得手〕	二 一四
ふうし〔風刺〕	三 一七	ふうとう〔封筒〕	二 一四	ふえにつくす〔フエニックス〕	五 一四
ふうしゃ〔風車〕	三 一七	ふうどう〔風洞〕	二 一五	ぶえのすあいれす〔ブエノスアイレス〕	二 一四
ふうしゅ〔風趣〕	一 一八	ふうどか〔風土化〕	一 一五	ふえる〔増える〕	一 一四
ふうしゅう〔風習〕	二 一八	ふうどき〔風土記・ふどき〕	七 一五	ふえん〔敷衍〕	一 一四
ふうしょ〔封書〕	三 一八	ふうは〔風波〕	四 一五	ぶえんりょ〔無遠慮〕	四 一四
ふうしょく〔風蝕〕	一 一八	ふうばいか〔風媒花〕	二 一六	ぶおとこ〔醜男〕	二 一四
ふうじん〔風塵〕	二 一八	ふうひょう〔風評〕	一 一六	ふか〔府下〕	一 一四
ふうじん〔風信〕	一 一九	ふうふ〔夫婦〕	五 一六	ふか〔鱧〕	一 一四
ふうすい〔風水〕	三 一九	ふうふう	一 一八	ふか〔孵化〕	二 一四
ふうせつ〔風雪〕	一 一九	ふうぶつ〔風物〕	五 一八	ふか〔付加〕	一 一四
ふうせつ〔風説〕	一 二〇	ふうふなか〔夫婦仲〕	一 一八	ふか〔負荷〕	三 一四
ふうせん〔風船〕	四 二〇	ふうぶん〔風聞〕	一 一八	ぶか〔部下〕	二 一四
ふうせんだま〔風船玉〕	五 二二	ふうぼう〔風貌〕	七 一八	ふかい〔不快〕	八 一四
ふうせんばくだん〔風船爆弾〕	一 二二	ふうみ〔風味〕	二 一九	ふかい〔深い〕	四 一四
ふうそう〔風葬〕	七 二二	ふうもん〔風紋〕	二 一九	ふかいしすう〔不快指数〕	一 一四
ふうそう〔風霜〕	一 二二	ふうりゅう〔風流〕	三 二〇	ふかいり〔深入り〕	一 一四
ふうそく〔風速〕	二 二二	ふうりゅうおとこ〔風流男〕	一 二〇	ふかかい〔不可解〕	一 一四
ふうそくけい〔風速計〕	二 二二	ふうりよく〔風力〕	一 二一	ふかき〔深き〕	八 一六
ふうぞく〔風俗〕	一 二三	ふうりん〔風鈴〕	四 二一	ふかく〔深く〕	八 一六
ふうたい〔風体〕	二 二三	ふうる〔プール〕	四 二二	ふかく〔不覚〕	二 一八
ふうち〔風致〕	二 二三	ふうろう〔風浪〕	一 二三	ふかく〔富岳・富嶽〕	一 一八
ふうちく〔風致区〕	三 二三	ふうん〔不運〕	二 二四	ぶかく〔舞楽〕	四 一八
ふうちりん〔風致林〕	二 二三	ふうん〔武運〕	一 二四	ふかけつ〔不可欠〕	一 一八
ふうちよう〔風潮〕	二 二三	ふうんちようきゅう〔武運長久〕	四 二五	ふかこうりよく〔不可抗力〕	一 一八
ふうてい〔風体〕	二 二三	ふえ〔笛〕	一 二五	ふかさ〔深さ〕	五 一八
ふうてん〔瘋癲〕	三 二三	ふえき〔不易〕	一 二四	ふかざけ〔深酒〕	四 一八

ふかしぎ〔不可思議〕	三七	一八八	ふき〔附記〕	一	二〇九	ふきつ〔不吉〕	六	二二六
ふかしも〔深霜〕	一二	一九〇	ふぎ〔不義〕	四	二〇九	ぶきっちょう〔不器用〕	八	二二七
ふかしんじょうやく〔不可侵条約〕	一	一九〇	ぶき〔武器〕	三	二〇九	ふきつのる〔吹き募る〕	六	二二七
ふかす〔吹かす〕	一四	一九〇	ふき〔不起〕	一	二二〇	ふきでる〔吹き出る〕	二	二二七
ふかす〔更かす〕	二四	一九〇	ふきあがる〔吹き上がる〕	五	二二〇	ふきとおる〔吹き通る〕	二五	二二七
ふかだ〔深田〕	一八	一九一	ふきあげる〔吹き上げる・噴き上げる〕	三	二二〇	ふきとばす〔吹き飛ばす〕	一三	二二八
ぶかっこう〔不格好・不恰好〕	一	一九二	ふきあれる〔吹き荒れる〕	一	二二〇	ふきながし〔吹き流し〕	四	二二八
ふかづめ〔深爪〕	一	一九二	ふきい〔噴井〕	一九	二二〇	ふきならす〔吹き鳴らす〕	一六	二二九
ふかで〔深傷〕	三	一九二	ふきいど〔噴井戸〕	七	二二一	ふきぬき〔吹き抜き〕	四	二二九
ふかのう〔不可能〕	六	一九二	ふきいど〔吹き入る〕	三四	二二一	ふきぬく〔吹き抜く〕	一三	二二九
ふかのひれ〔鱧の鰭〕	一	一九二	ふきいれる〔吹き入れる〕	一	二二二	ふきぬける〔吹き抜ける〕	三	二二〇
ふかふか	一一	一九二	ふきおろす〔吹き下ろす〕	三三	二二二	ふきのとう〔蔀の蔭〕	一四	二二〇
ぶかぶか	一	一九三	ふきかえす〔吹き返す〕	二	二二三	ふきはる〔吹き霽る〕	四	二二四
ふかぶかと〔深深と〕	一三〇	一九三	ふききる〔吹き切る〕	一	二二三	ふきふり〔吹き降り〕	二四	二二四
ふかまる〔深まる〕	三二	一九七	ふきけす〔吹き消す〕	三	二二三	ふきまくる〔吹き捲る〕	四	二二四
ふかみ〔深み〕	一〇三	一九八	ふきげん〔不機嫌〕	一五	二二四	ふきまどはさゆ〔吹惑〕	一	二二五
ふかみいく〔深み行く〕	四	二〇一	ふきこす〔吹き越す〕	一一	二二四	ふきみ〔不気味・無気味〕	四七	二二五
ふかみぐさ〔深見草〕	一	二〇一	ふきこむ〔吹き込む〕	一〇	二二四	ふきみだす〔吹き乱す〕	五	二二六
ふかみどり〔深緑〕	一一	二〇一	ふきさらす〔吹き曝す〕	二	二二五	ふきゅう〔不朽〕	二	二二六
ふかみゆく〔深行〕	一	二〇二	ふきしきる〔吹頻きる〕	一	二二五	ふきゅう〔普及〕	一	二二六
ふかめる〔深める〕	一三	二〇二	ふきしく〔吹頻く〕	六	二二五	ふきゆうする〔吹揺〕	一	二二七
ふかもや〔深霧〕	八	二〇二	ふきしなふ〔吹撓〕	一	二二五	ふきよう〔不況〕	八	二二七
ふかよど〔深淀〕	一一	二〇二	ふきしをる〔吹萎〕	一	二二五	ふきよう〔不興〕	二	二二七
ふかよど〔深淀〕	一	二〇三	ふきすさぶ〔吹き荒ぶ〕	一五	二二五	ふきよう〔布教〕	三	二二七
ふかん〔俯瞰〕	一五	二〇三	ふきそく〔不規則〕	五	二二六	ぶきよう〔不器用・無器用〕	一	二二七
ぶかん〔武官〕	二	二〇三	ふきだす〔吹き出す〕	六	二二六	ぶぎよう〔奉行〕	一	二二八
ぶかん〔武漢〕	八	二〇三	ふきだす〔吹き出す〕	一	二二六	ぶぎようしよ〔奉行所〕	一	二二八
ふき〔蔀〕	一八三	二〇四	ふきたてる〔吹き立てる〕	三	二二六	ふきようわおん〔不協和音〕	二	二二八

ぶきよく〔舞曲〕	二二三八	ふくかん〔副官〕	一二六一	ふくすけたび〔補助足袋〕	一二六七
ふきよせる〔吹き寄せる〕	一七二三八	ふくかん〔復刊〕	一二六一	ふくせい〔複製〕	五二六七
ふぎり〔不義理〕	四二二九	ふくがん〔復眼〕	二二六一	ふくせん〔複線〕	二二六八
ふきん〔布巾〕	二二二九	ふくぎょう〔副業〕	四二六一	ふくそう〔服装〕	一七二六八
ふきん〔付近〕	二二二九	ふくきん〔腹筋〕	一二六一	ふくそう〔副葬〕	一二六八
ふきんこう〔不均衡〕	二二二九	ふくげん〔復元〕	四二六一	ふくだい〔副題〕	二二六八
ふく〔服〕	八七二二九	ふくこう〔腹こう・腹腔〕	三二六一	ふくだむ	一二六九
ふく〔福〕	八二二二	ふくこう〔復交〕	一二六一	ふくだむ〔蓬起〕	三二六九
ふく〔吹く〕	五七八二二二	ふくこう〔復興〕	六二六二	ふくちゅう〔腹中〕	二二六九
ふく〔噴く〕	五二二五一	ふっこうかいぎ〔復興会議〕	二二六二	ふくつう〔腹痛〕	八二六九
ふく〔拭く〕	五八二五二	ふっこうさい〔復興祭〕	三二六二	ふくとく〔福德〕	一二六九
ふく〔茸く〕	六二五四	ふくさ〔袱紗〕	九二六二	ふくとしもしなし〔吹〕	一二六九
ふぐ〔河豚〕	七四二五四	ふくざつ〔複雑〕	三五二六二	ふくとしん〔副都心〕	一二六九
ふぐなべ〔ふぐ鍋〕	四二五六	ふくし〔福祉〕	一二六三	ふくのかみ〔福の神〕	一二六九
ふぐ〔不具〕	一七二五六	ふくじ〔服地〕	四二六三	ふくはい〔腹背〕	一二七〇
ふく〔更く・ふける・更くる〕	四六二五七	ふくしじょ〔福祉所〕	一二六四	ふくびぎ〔福引〕	二二七〇
ふくあん〔腹案〕	一二五八	ふくしねんきん〔福祉年金〕	一二六四	ふくぶ〔腹部〕	一〇二七〇
ふくいく〔馥郁〕	六二五九	ふくしや〔複写〕	三二六四	ふくべ〔瓠・匏〕	四二七〇
ふくいん〔幅員〕	一二五九	ふくしゅう〔復習〕	七二六四	ふくへき〔腹壁〕	一二七〇
ふくいん〔福音〕	四二五九	ふくしゅう〔復讐〕	一一二六四	ふくぼく〔副木〕	三二七〇
ふくいん〔復員〕	三一二五九	ふくじゅう〔服従〕	三二六四	ふくまく〔腹膜〕	五二七〇
ふくいんしよ〔福音書〕	二二六〇	ふくじゅうそう〔福寿草〕	七八二六五	ふくまめ〔福豆〕	一二七一
ふくいんしゃ〔復員者〕	三二六〇	ふくしょう〔復唱・復誦〕	三二六七	ふくみね〔含み音〕	一二七一
ふくいんせん〔復員船〕	三二六〇	ふくしよく〔復職〕	三二六七	ふくむ〔含む〕	八四二七一
ふくいんへい〔復員兵〕	二二六〇	ふくしよく〔副食〕	二二六七	ふくめつ〔覆滅〕	一二七三
ふぐう〔不遇〕	七二六〇	ふくすい〔腹水〕	一二六七	ふくめる〔含める〕	二八二七三
ふくえき〔服役〕	一二六〇	ふくすう〔複数〕	一二六七	ふくめん〔覆面〕	七二七四
ふくがぞう〔伏臥像〕	一二六一	ふくすけ〔補助〕	三二六七	ふくも〔服喪〕	二二七四

ふくよう〔複葉〕	三二七五	ふけやく〔老け役〕	一二八九	ぶざま〔無様・不様〕	一〇三〇一
ふくよか	一五二七五	ふける〔更ける〕	五二八九	ふさん〔釜山〕	四三〇一
ふくよかに	五七二七五	ふける〔耽る〕	一五二八九	ふし〔不死〕	八三〇一
ふくらか	一〇二七七	ふけん〔府県〕	一二八九	ふじ〔藤〕	四三四三〇一
ふくらす〔膨らす〕	二二七七	ふげん〔不言〕	一二八九	ふじ〔不治〕	五三三三
ふくらすずめ〔脹雀〕	一二七七	ぶげんしゃ〔分限者〕	二二八九	ふじ〔不二・富士〕	一七六〇三三三
ふくらはぎ〔脹ら脛〕	五二七七	ふげんぼさつ〔普賢菩薩〕	二二九〇	ぶし〔武士〕	二二二二六
ふくらます〔膨らます〕	一一二七八	ふこう〔不孝〕	二二九〇	ぶじ〔無事〕	五四三六二
ふくらむ〔膨らむ・脹らむ〕	四八二七八	ふこう〔不幸〕	五三二九〇	ふじあざみ〔不二薊〕	二二二六四
ふくらめる〔膨らめる・脹らめる〕	二二二七九	ふこう〔符号〕	六二九一	ふしあな〔節穴〕	五三六四
ふぐり〔陰囊〕	二〇二八〇	ふこう〔富豪〕	二二九二	ふしあわせ〔不幸せ〕	一三六四
ふぐりゅう〔伏流〕	三二八一	ふこうかく〔不合格〕	二二九二	ふじいろ〔藤色〕	三三六四
ふくれあがる〔膨れ上がる・脹れ上がる〕	三二八一	ふごうり〔不合理〕	三二九二	ふしおがむ〔伏し拝む〕	一三六四
ふくれる〔膨れる・脹れる〕	五二八一	ふこく〔布告〕	三二九二	ふじがわ〔富士川〕	二六三六四
ふくろ〔袋・囊〕	二二八二一	ふさ〔房〕	二二二九二	ふしぎ〔不思議〕	一〇三三六五
ふくろう〔梟〕	七九二八五	ふさい〔不才〕	二二九六	ふじさん〔富士山・不二山〕	四二二六八
ふくろおび〔袋帯〕	一二八七	ふさい〔夫妻〕	一二二九六	ふししずむ〔伏し沈む〕	一三七〇
ふくろこうじ〔袋小路〕	二二八七	ふさい〔負債〕	一五二九六	ふしぜん〔不自然〕	五三七〇
ふくろはり〔袋張り〕	一二八七	ふさい〔不在〕	一六二九七	ふじだな〔藤棚〕	七一三七〇
ふくろふち〔袋藤〕	一二八七	ぶさいく〔不細工〕	四二九七	ふじちゃくりく〔不時着陸〕	一三七二
ぶくん〔武勲〕	一二八七	ふさいよう〔不採用〕	一二九七	ふしちよう〔不死鳥〕	一三七二
ふけ〔雲脂〕	八二八七	ふさがる〔塞がる〕	六二九七	ふじつ〔不実〕	七三七二
ふけ〔瀝〕	一二八八	ふさぎのむし〔塞ぎの虫〕	一二九七	ぶしつけ〔不躰〕	七三七二
ふけい〔父兄〕	四二八八	ふさく〔不作〕	四二九八	ぶじつる〔藤蔓〕	一四三七二
ふけい〔父系〕	一二八八	ふさぐ〔塞ぐ〕	三七二九八	ふしど〔臥し所〕	三二三七三
ふけいき〔不景気〕	一五二八八	ぶさた〔無沙汰〕	一四二九九	ぶしどう〔武士道〕	四三七四
ふけしづもれる〔深静〕	一二八八	ぶざつ〔蕪雑〕	三二九九	ふじなみ〔藤波〕	七四三七四
ふけつ〔不潔〕	三二八八	ふさふさ〔房房〕	四〇二九九	ふじのはなぶさ〔藤の花房〕	六七三七六

ふじばかま〔藤袴〕	三三七八	ふしようじ〔不祥事〕	五三八四	ふせい〔不整〕	一三九七
ふしぶし〔節々〕	二〇三七八	ふしようひげ〔無精髭〕	四三八四	ふぜい〔風情〕	三三三九八
ふしまつ〔不始末・不仕末〕	一三七八	ふしようふずい〔夫唱婦隨〕	一三八四	ふせいほ〔伏庵〕	一三九八
ふじみ〔不死身〕	一三七八	ふしようしゃ〔負傷者・負傷兵〕	七三八四	ふせき〔布石〕	一三九九
ふじみ〔富士見〕	五三七九	ふしよく〔腐食・腐蝕〕	六三八四	ふせぐ〔防ぐ〕	四〇三九九
ふじみこうげん〔富士見高原〕	八三七九	ぶじよく〔侮辱〕	七三八五	ふせこ〔伏籠〕	一四〇〇
ふじみてい〔富士見亭〕	二二七九	ふしよくど〔腐食土〕	二三八五	ふせつ〔敷設・布設〕	四四〇〇
ふじみの〔富士見野〕	二四三七九	ふじよし〔婦女子〕	三三八五	ふせっせい〔不摂生〕	一四〇〇
ふじむすめ〔藤娘〕	二三八〇	ふじよりよう〔扶助料〕	三三八五	ふせどい〔伏樋〕	二四〇〇
ふしめ〔節目〕	四三八〇	ふしん〔不信〕	八三八五	ふせや〔伏屋〕	一四四〇〇
ふしや〔富者〕	二三八〇	ふしん〔不振〕	二三八六	ふせる〔伏せる〕	二六四〇一
ふしゆ〔浮腫〕	四三八〇	ふしん〔不審〕	三三八六	ふせる〔臥せる〕	三四四〇二
ふしゆう〔腐臭〕	三三八〇	ふしん〔普請〕	二七三八六	ふせん〔不戦〕	一四〇三
ふじゆう〔不自由〕	一八三八〇	ふしん〔腐心〕	一三八七	ふせん〔附箋〕	一四〇三
ふじゆん〔不純〕	五三八一	ふじん〔夫人〕	四八三八七	ふぜん〔不善〕	三四〇三
ふじゆん〔不順〕	一三八一	ふじん〔婦人〕	二四三八八	ふぜん〔憮然〕	一四〇三
ぶしゆん〔撫順〕	四三八一	ふじん〔布陣〕	四三八九	ふそ〔父祖〕	三一四〇三
ふじよ〔婦女〕	五三八一	ぶじん〔武人〕	三三八九	ぶそう〔武装〕	二四四〇四
ふじよ〔扶助〕	一三八二	ふじんか〔婦人科〕	一三八九	ぶそうおう〔不相応〕	一四〇五
ぶしよ〔部署〕	六三八二	ふしんじん〔不信心〕	一三八九	ふそく〔不足〕	三五四〇五
ふしよう〔不肖〕	一三八二	ふしんば〔普請場〕	九三八九	ふぞく〔付属〕	一四〇六
ふしよう〔不詳〕	一三八二	ふす〔伏す〕	一四〇三九〇	ふそくふり〔不即不離〕	二四〇六
ふしよう〔負傷〕	二二三八二	ふずい〔不随〕	七三九四	ふぞろい〔不揃〕	五四〇六
ふしよう〔不祥〕	一三八三	ふすう〔負数〕	一三九四	ふそん〔不遜〕	七四〇六
ふじよう〔浮上〕	一三八三	ぶすぶす	四三九四	ふた〔蓋〕	八四四〇七
ふじよう〔不浄〕	六三八三	ふすま〔襖〕	九四三九四	ふだ〔札〕	五一四〇九
ぶしょう〔武將〕	一二三八三	ふせ〔布施〕	七三九七	ぶた〔豚〕	一一四一〇
ぶしょう〔武昌〕	二三八四	ふせい〔不正〕	七三九七	ふたあけ〔蓋明け〕	一四一四

ふたい〔附帯〕	一四四	ふだらく	一四三	ふちよう〔不調〕	二四五
ふだい〔譜代〕	一四四	ふたらさん〔二荒山〕	四九四	ぶちよう〔部長〕	七四五
ぶたい〔部隊〕	六九四	ふたり〔二人〕	二四四	ふちようわ〔不調和〕	四四二
ぶたい〔舞台〕	七二四	ふたん〔負担〕	八四四	ふちん〔浮沈〕	六四五
ぶたいうら〔舞台裏〕	三四八	ふだん〔不断〕	九四四	ふつう〔不通〕	一四五
ふたいてん〔不退転〕	二四八	ふだん〔普段〕	二四四	ふつう〔普通〕	四四三
ふたえまぶた〔二重瞼〕	二四九	ぶだん〔武断〕	一四四	ふつうせんきょ〔普通選挙〕	二四五
ふたおや〔二親〕	三四九	ふだんぎ〔普段着〕	四四三	ぶつえん〔仏縁〕	二四三
ふたご〔双子〕	三四九	ふだんな〔不断菜〕	一四四	ぶつか〔物価〕	九四三
ふたごころ〔二心〕	六四九	ふち〔淵・洑〕	二六四	ぶっかく〔仏闍〕	一四五
ふたごころめ〔二言目〕	一四九	ふち〔縁〕	一四九	ぶっかしう〔物価指数〕	一四三
ふたござ〔双子座〕	二四九	ふぢ〔不治〕	五四九	ぶっかつ〔復活〕	一四五
ふたごやま〔双子座〕	三四九	ふち〔布置〕	七五〇	ぶっかつさい〔復活祭〕	一三四
ふたぎまに	一四九	ふち〔扶持〕	六五〇	ぶつかる	一三四
ふだしょ〔札所〕	二四〇	ぶちあたる	二四〇	ぶっかん〔副官〕	一四五
ふたたび〔再び〕	三〇六	ぶちこむ	一五〇	ぶっかん〔復刊〕	一四五
ふだつき〔札付〕	二四〇	ふちせ〔洑瀬〕	八五〇	ぶっき〔富貴〕	八四五
ふたつなし〔二つなし〕	二四〇	ふちどる〔縁取る〕	二五〇	ぶっき〔復帰〕	一三五
ふたつめ〔二つ目〕	一四〇	ふぢのしたかげ〔藤下風〕	一五一	ぶつぎ〔物議〕	一四六
ふたなか〔二七日〕	二四〇	ふぢのはなぶさ〔藤花房〕	一五一	ぶつきゅう〔復旧〕	三四六
ぶたにく〔豚肉〕	二四〇	ふぢはらのおほみやどころ〔藤原大宮處〕	一五一	ぶつきょう〔仏教〕	三四六
ふだのつじ〔札の辻〕	一四〇	ふちゃく〔不着〕	一五一	ぶつきらぼう〔ぶつきら棒〕	一四六
ふたば〔双葉・二葉〕	二四〇	ふちゃく〔付着・附着〕	三四五	ぶつぎり〔ぶつ切り〕	一四六
ふたまた〔二股〕	二四〇	ふちやく〔付着・附着〕	三四五	ぶつきん〔腹筋〕	一四六
ふたまたがわ〔二股川〕	二四二	ふちゅうりょうり〔普茶料理〕	四五一	ぶつぐ〔仏具〕	八四五
ふたみがうら〔二見カ浦・二見が浦〕	五四二	ふちゅう〔不忠〕	四五一	ぶづくえ〔文机〕	六四五
ふたみち〔二道〕	一四二	ふちよう〔符中〕	三四五	ふくら	五四五
ふためく	一四二	ふちよう〔符丁・符牒〕	一四二		

ぶつけ〔仏家〕	一四五九
ぶっけん〔復権〕	一四五九
ぶっけん〔物件〕	二四五九
ぶっこう〔復交〕	一四五九
ぶっこう〔復興〕	七四五九
ぶっし〔仏子〕	三四五九
ぶっし〔仏師〕	七四六〇
ぶっし〔物資〕	一一四六〇
ぶっしき〔払拭〕	一四六〇
ぶっしつ〔物質〕	一〇四六〇

計

一四七四五 首

ひる【名詞】〔続き〕

昼の飯食さざりければひとひらの菓子与ふればそのみのは食しき

①

部屋内をぬけてとんぼはゆきにけり昼のねざめのあくびの涙②

(現代短歌大系)

ほこりあがる巷の昼のたへがたくさびしく家にくかへり来りぬ①

ほそぼそと、其処ら此処らに蟲の鳴く、昼の野に来て読む手紙か

な①

細々と昼の蟲の音なきつぎて秋時雨めく雨となりにけり④

(宿墨詠草)

牡丹は散りにし瓣のいくひらを色褐せて地に昼をしづけし

(多磨四)

歩兵一個大隊包囲されたり急援隊われは急ぎ昼も夜もゆく

(支那事変戦地)

ホルスタインの種反芻の眼かぎろひぬ昼微かなる潮の音あり

幌をうつ雨脚はやし昼ながら小田の蛙をききつつゆくも①(地蔵)

まあかなる薔薇いよいよあかくして昼の深さを感じけるかも

(あおぞら)

まぎれなく夜霧移ろふ冬青の梢暑かりし昼は遠きものの如し

(多磨二)

真菰草潮来出島の色町の昼しづかにもとほり雨すれ(放庵歌集)

浅野 豊子

米田 雄郎

武山 英子

石川 啄木

岡 麓

田中 紀子

深町 松雄

葛原 妙子

橋田 東声

河本 遣芳

山崎 隆子

小杉 放庵

ましろくぞ鶴はイめ今ただに春昼にして幽けかるのみ⑩

(現代短歌大系)

まちまちし夕立や降らむ音おもく昼のいかづち鳴りひろこれる②

松の芽のにはひたちたるこの山の昼のふかきに鶯鳴く聞ゆ

(新万葉集二)

松の芽のみどりあかるし昼ふけてこの大き谷に春の雨ふる

(新萬葉集四)

松山の目蔭うつろふさ庭べは昼静なり人なきがごと(新萬葉集六)

窓のもと昼も眠りてもとめにき逢ひえぬひとの髪のはつれを①

真夏日の昼の床屋のしづけさよ時をりひびく九官鳥のこゑ①

真夏日の昼ふかくしてひそけきに人ほとほと叩くわが門⑥

舞ひ下りし鶯のゐところたしかにてげんげ田圃の昼しづかなり

(新萬葉集六)

ま夜の空ひるの如くに灼きしさへいまはのつみと思ふばかりぞ⑤

丸の内昼の驟雨の雲のなかに電灯しろくともりゐにけり

(新萬葉集六)

万葉は夜の疾風もまた昼の微風も聴く生ける林よ(碧潮)

見下しの靡附の小田の稻幹に沿ふかげ見れば昼はふかしも①

(角川文庫)

岬山の本草のしげりみづみづし波立ちさわぐ昼の大海

みじろぎも叶はずなりし昼はただ香を焚かしめてうつらありける

水涸れし広き川原におりたちてひるの水をふみつつゆけり

(新萬葉集七)

北原 白秋

森園 天涙

池之上 弘

佐藤 淳一郎

西田 幾多郎

百田 楓花

中村 正爾

岡本 かの子

中川 虹光

鹿兒島 壽藏

林 道夫

岡崎 義恵

宮 柊二

高田 浪吉

中川 武

松倉 敏

みち潮のしきり岸鬱舌音は昼ふかくして聞こえつつあり③

(角川文庫)

みちのくの馬商人と長をぢと市たつ昼の辻の立ち話し(地懐)

道端の石ぬくもれり秋深き山のなだりの昼のあかるさ①

峰遠く昼を横たふ雲の層照りひそむ観れば春や逝くらし

(新万葉集二)

御眼病ます師の枕辺は昼ながらスタンドの青き灯を点けましぬ

(多磨一)

身を病めば昼を侘しく家籠り鋸の目を立つ薄日の庭に(新万葉集九)

向ひ屋の軒陰過ぎる昼の風時の間白く埃あがれり(新萬葉集九)

向ふ岸は 真夏のひるを 人はあらず 土くれの家 散らばれり

見ゆ②

むらがる石にしらしらと日は射しゐて痛きまで澄む昼の虫が音

③

村の子は両手を振り振りわが汽車を見送りてをり筑紫路の昼②

明治神宮西参道の昼闇けて清きひと照りの風ぞ過ぎたる⑥

(現代短歌大系)

目のふかく昼も臆する男あり光れる秋をぢと凝視むる①

眼を避けし傷包帯を顔中に巻かれて昼の日差まばゆし①

眼をどちて君も睡きか神苑の青葉ふかきところ昼の風とまる

炎立つ麻の畑やひっそりと虫の音やみて昼は深けれ

持てあます嘴らしもベリカンはこの昼を一人惚けてゐるなり①

宮 柊 二

橋 田 東 声

山 川 柳 子

鎌 田 民 治

影 山 邦 俊

山 本 義 雄

小 野 進

下 村 海 南

木 俣 修

石 川 まき子

北 原 白 秋

北 原 白 秋

三 浦 武

平 中 歳 子

津 端 修

野 村 清

モデルのはく息白く見ゆるアトリエや昼の炭火もやや衰へぬ

(多磨三)

ものうくてわがよこたはるかたはらに猫も寝ねをり昼の板じき

(新萬葉集三)

もみぢせる岩間をほそくしたたりて垂水のおとは昼もさみしき

(祖国)

森かげのダリヤ畑に日はささず昼ちかくして露の乾かぬ(きさらぎ)

宿の子と遊びをりたるをさな子は昼の畳に共にまどろむ②

山峽の日溜りぬくし短日の昼しばらくを黄なる蝶とぶ(多磨二)

山川の向う堤をとほりゆくけもの見にけり昼の深きに(新万葉集二)

山ざくちあるがなきかの昼の風吹けばや花のひまなく散れる

(新萬葉集八)

山ざとの小雨の昼はしら壇のかまどの前に鴉きて啼く(春泥集)

山城の浄瑠璃寺道とほく来て春くもる日の昼をあゆめり(青き集)

山にかもこだまはするや遠方の昼かみなりのつぎてしきこゆ③

(現代短歌大系)

山に入る小径のほかは一面に熊笹生ひて昼もをぐらく(素浪)

山の上の照り静かなる沼の辺に秋草しきて昼の餉ぞする①

山の顔土用の昼をもてあぐむものなく蟬に聞き入れるかな②

山の昼地階の室に二三点くろきを見れば遊ぶこほろぎ③

山のみどり映えしめて昼の雨あがる娘のこゑけふの何処よりする

東 村 章

駒 井 牧 人

島 田 兵 三

和 田 山 蘭

隅 田 葉 吉

原 田 力 子

奥村 奥右衛門

山 田 葩 夕

伊 藤 とよ子

川 田 順

徳 野 鶴 子

川 浪 磐 根

與 謝 野 晶 子

與 謝 野 寛

塚 田 菁 紀

山畑は昼だにさびしむろこしの広葉ならして秋のかぜ吹く①

金子元臣

山深く人聚落して風花のちらつくひるを機織りこもる(新萬葉集七)

広川 洩

山道は青葉にしづく雨の音牛ら群れ行く昼のあかるさ(多磨二)

久保 太郎

夜来の雪跡なく消えてビル街の晝は静かにもやの立つ見ゆ

北 出 喜美子

(多磨四)

やるせなくこころうつけて昼ふかしへびのごとくもかめの酒のむ

和田 山 蘭

(きさらぎ)

友禅を染めあげるまでの糊付と知りて見てゐき昼もくらき土間⑬

松 村 英 一

ゆきつまりし国のすがたを思ひつつすなはち昼の飯終りたり⑤

松 田 常 憲

雪ときに小雨となりてこの昼の明るき空よ春来るらし(青板)

中 島 哀 浪

雪の原に昼の日光の照り満てば白鷺のこゑ張りて来らしも③

木 俣 修

(角川文庫)

雪衾斑らに溶けて昼近しラジオは遠き空より聞こえ来①

久保井 信 夫

ゆたかなる川の響のこもりつつ昼さへ寂し溪の青葉は①

大 橋 松 平

浴室に昼も隣の三味ひびく我が旅今は魯に遠きかな①①

與謝野 寛

好く晴れし秋の白雲あふぎてはあたたかきかも主の日の昼は

三 木 羅 風

(トラビスト歌集)

よもすがらねぶりねぶりしねぶの花ひるさへ夢のおも影にして③

八 田 知 紀

(現代短歌大系)

夜も昼もいとましあらずなをもひて目につくまでに吾やせにけり

中 井 コツフ

①

夜も昼も消さぬ悲願のひとつに万燈籠にあかるともし灯③

清 水 乙 女

夜も昼も適温適湿すくと苗は伸びたつ機の仕組みにて⑤

鈴 木 康 文

代々木野の参宮道は冬晴れて冴えとのりたり昼のみ燈

岡 本 かの子

(わが最終歌集)

夜となく昼となくこころの奥処に降りつづく彼岸の雨の青黒き音

米 田 雄 郎

⑤

夜に昼に思ひつづくる果にして生命の行方つひに知らずも

金 田 千 鶴

夜に昼に地震ゆりつづくこの頃のこころすさびのすべなかりけり

若 山 牧 水

夜の底あまた目差しを吸ひしもの昼を簡明に白くねむれり

高 安 国 世

(虚像の鳩)

夜も昼もなき緑児よま夜中に声たてはしやぎねかせず親を①

武 川 忠 一

夜も昼も机辺にゐてくだつ世をたまたまなげく古蜘蛛ぞ吾は②

吉 井 勇

夜も昼も暑さつづきて稲によし雨ふらぬ空をみつしいぬる③

小 平 藤 男

夜も昼も抱きかかへし肩のこりいまだとけねば恋しき吾児よ⑩

今 井 邦 子

両眼をかくされたまま七日の昼と夜を仰向けに臥て、ちっとして

前 田 夕 暮

ゐよといふのだ⑨

リラ青くまだ咲かぬ日は目を閉ちてひるの夢見る窓のよろひ戸

與謝野 晶 子

(心の遠景)

林檎あまた積荷の跡にこぼれゐて港の昼はひそかなりけり

菊 池 夏 彦

(新万葉集三)

ルソン島南北狭撃成りたりと聞きし昼よりいくときか経つ①

滝 口 英 子

老柏の老いしげりたる石だたみ孔子の廟の昼静かなり(新萬葉集五)

田 岡 雁 来 紅

六月の昼をきはひのぶる木櫛の若葉の光沢は陽をはじきをり

河 合 千 代 子

(新萬葉集二)

わが恋にゆかりあらねどひとすちに近くさし入る昼のいなづま① 近江満子
わが接穂芽ぶき初めて暖き昼をしきりに雉子鳴く声す(新萬葉集四) 鈴木康文
若菜積む吾児がこゑかも松風のかすかにひびく昼のはたけに 杉本萍吉

(新萬葉集四)

若葉風ひそまる晝やつぎつぎに羽蟻生れつつ陽光ともしさ

(多磨四)

わが額に曳くくらき蟻見し人を思ひ出て昼の部屋に立つ④

(角川文庫)

わが昼の風呂桶に来て蝶ひとつ眠る悲しさ秋のかなしさ(春泥集)

我が村の昼の往還日にひかり誰か杭うつはたりはたりと

わが山に戻り来にけり、くりやべに、昼を鳴けるは、こほろぎな

らむ(遼空)

和倉びと入江に黄なる梁を立つ昼も其処のみ月ある如し⑬

我とわがいら立つ心もとあまし寝てをる顔に昼の蚊きたる

(新萬葉集八)

丘の道くだりある昼あをあと睦月の空の澄むに親しむ⑧

屋上の金魚売り場に遊ぶ児ら消し忘れたる昼の灯白し②

ヴェネチアの昼の市なる海の漁われの心を躍らしめたり④

ひる【名詞】〔蛭〕

ヒル綱に属する環形容動詞物の総称。体長数センチ。細長く、扁平、体は三四の体節からなる。陸産のヒルは淡水や湿地に生息す。海産のヒルは魚類や甲殻類に寄生す。

アクロバタイクの踊り子たちは水の中で白い蛭になる夢ばかり見 斎藤史

朝あけの門田の植田ひややかに上澄む水に蛭のおよげり

足弱の神子の蛭子を沖へやるとうなびの水門に小船うけたり①

吾孫子の古き沼より採りて来し藻草に蛭の子が生れたり

いつのまにか夏のけしきになったのねあら足もとで蛭がなくなわ①

綸垂るるわが足もとに跳びよりてこの蛭らにものおそれなし

いにしへの蛭が小鳥の跡どころ稲茎くろく時雨にぬれて④

生れたる子は骨のなき蛭子として海に流せし事実を伝ふ⑦

雲取を越えて来ぬれば山蛭の口処あはれむ三人よりつつ⑥

口中に蛭の幾百うぐめけり夢さへきよくわれには来ぬか③

孤独なる思ひに暮るる日の夕べ蛭およぐ鉢を街に見にゆく

しづかなるものにもあるか峽田にて蛭およぐべくなりぬ春日は⑭

(小園)

初夏の光明るき田の面蛭のひらひらと泳ぎ居るかも

寺山に棲める山蛭血を吸ふを善男われのこはとときく③

ひくひくと水面およぐ蛭みれば病重りし人気がかかる(新萬葉集三)

蛭が取りし血のかなだらひ 日記帳 学校ばかま 夕ぐれの家

蛭の住む森わけ入りて蛭に血を吸はれきといふ蛭物語①

服ぬぎて蛭とりかはしあるひまも土に音して落ちつぐといふか⑥

扁平に泳ぎ過ぐるは青き蛭立てる土橋のかげにかくろふ④

溝川をひらひら蛭の泳ぐ見れば移り来りて慣れぬ我かも

(新萬葉集三)

斎藤史

古泉千樫

太田水穂

土屋文明

潮みどり

半田良平

太田水穂

四賀光子

斎藤茂吉

山本友一

橋本徳寿

斎藤茂吉

結城哀草果

千代国一

近藤武夫

宮沢賢治

正岡子規

松田常憲

千代国一

小山茂子

めぐりくる春や南の池水のひかりにうかぶ薄紅の蛭(新萬葉集二)
 山かげを吾等来しかば浅水に蛭のおよごそ寂しかりけれ③
 山蛭の吸ふにまかせし肌みればいしくも敵を追ひ来りしか⑤
 夜はいたく疲れ臥れど蛭こもに吸はれし痕うづ痒く眠られぬかも

荒井 信太郎
 斎藤 茂吉
 土岐 善磨
 結城 哀草果

ひる【動詞ハ上二】「干る・乾る」

①水分がなくなる。かわく。②汐が引いて海の底があらわれる。

いく日のしぐれに濡れて干る間なき養は着ながら今日も桑摘む

大野 信貞

(新萬葉集二)

今日のみと磐餘の陂に泣かれにし皇子の涙に池も乾るなく②

中河 幹子

汐干るを待つ間あやふき洪水の音聞きながら朝餉はむわれは

中田 勝正

咀ひつつ潮干る珠を居ゑたりし神も憎まずよき歌あるに⑨

與謝野 寛

滝つせのしづきにぬれしうつそ身の天つ日に干る匂ひかなしき

松本 仁

滝津瀬の飛沫にぬれて、かた時の乾る間もあらぬ草はさびしき①

福田 夕咲

谷あひをながるるかわの水乾るとさされに潜む黒き魚あはれ⑥

斎藤 茂吉

もの干せばよく干るほどの真日なかにあなそぞらし泡雪のふる

潮 みどり

①

ひる【名詞】「汗」

鉄筋コンクリート造りの高層建築物。ビル。

青芝に心よせぬし街の庭ビル建ちし後もしばしば夢む②

村野 次郎

赤き旗風になびけり境界のビルの間の遠き空の中②

片岡 恒信

アカシアの森をぬき立つビルの上に日の丸の旗高なびきをり

小畑 勇吉

あがり来し地上にて点る或ビルのかたち円形なるに氣附きつ③
 灯の満てるつつビルディングビル街の暗きを来つつ我が見上げた
 り②

初井 しづ枝
 川島 園子

秋の夜のつぎつぎ消ゆるビルの灯をうつして川のくろくよどめる

桐田 路村

②

朝空の裾辺黄ばみて黒々とたちならぶビルに遠近はなし②

高橋 希人

浅葱色に空暮れんとすどれもみなビルは茜の色に染まりて①

松井 如流

朝の銀座服部ビルの窓はみなあけはなたれてあるが涼しさ

池田 稻子

朝はやく入りつつくればビルヂングの中を吹きすぐる霧は親しき

山口 茂吉

足冷えてビルの廊下に人を待てり前のデパートの閉店のベルが鳴

長谷川 銀作

る④

新しき歌うたふべきさはあれどビルの谷間のここだ暗しも①

前田 夕暮

あたらしきビルに貸室の札ならびその高きより雪のふりくる①

上代 皓三

あたらしき塗装なりゆく焼けビルの足場に穩しい照る秋の日①

中村 正爾

暑き陽の落ちて暮れゆくビルディングのシャッターしまる音しづ

立花 馨

かにひびく①

あな深き今朝の朝霧遠ビルは竜宮のごと空に浮べる

中河 幹子

あはあはと西日のなかにビル立てりときのま曠野のごとくにも見

横田 専一

つ③

雨夜の街がなやむ光の深傷——ビルディングは四角な絆創膏であ

葉山 耕三郎

る①

或る時は月を怨みて佇ちたりし白山の坂今はビル建つ②

今井 よしの